

1月24日保育関係者サイエンスカフェにて

① 大井学研究プロジェクト代表による趣旨説明

②金沢市幼児相談室担当の先生より。市内に3箇所ある（教育プラザ富樫、八日市、森山）幼児相談室の役割について。通所するお母さんたちが、我が子の障害について、受け入れるまでの過程での揺れる心に寄り添うことを特に大事にしている。

③四つの私立幼稚園の先生のお話

* A幼稚園の先生より・・・気になる子の二つのケース

aちゃんのこと：気になるころは、落ち着きがない、通りざまに他の子をたたく、園のおもちゃなど物を壊す、友達のを勝手に触って壊してしまうなど。一対一で話をするとき「ごめんなさい」と反省をしている様子が見られる。身辺自立はでき、言葉で伝えたことは家に帰って母親に伝えることもでき、表現会ではきちんと発表できる。気にはなるが、パニックや強いこだわりはないので発達障害ではないだろうと思い、繰り返し言い聞かせて、また、練習をすればできるようになると思いこんで対応していた。参加者が事例を出し合う研修で担当の先生より「なぜ障害ではないと言い切れるのか？」と問われ、それまでの対応がaちゃんにとってよかったのかと考えている。障害ならば、できないものではないと認め、aちゃんが納得する方法や、やりやすい方法を見つけてあげることが必要で、aちゃんの行動にどんな意味があるのかを探ることがその子理解につながることはわかって、どんな視点を持てばいいのか、と悩む。親御さんにもどのように伝えればいいのかと悩む。

bちゃんのこと：活動に時間がかかる。会話にならなかつたり何か尋ねても無反応。「好きな食べ物は何か？」と云う問いにもすぐには答えないのだが、翌日「ハムと卵」と言いに来るので、励ましてあげる、待つてあげればできると考えていた。研修で担当の先生より「bちゃんは自分の気持ちがよく分からないのかもしれない」と指摘され、その様な視点で見ると、好きな場所に座る、好きな絵を描く、好きな遊びをするなどのときに、取り掛かりに時間がかかっている。好きな食べ物を翌日には言えたのは、家で母親に相談してのことだったと後日分かった。好きなものを選べないのなら代わりに選んであげようと私が切り替えると、活動にもスムーズにとりかかれるようになった。「のんびりした子」と云う理解ではなく、自分の気持ちが分からないのかもしれない、と正直にお母さんに伝えると、お母さんも、みなと同じようにして欲しいという考えを見直したいという返事をいただいた。aちゃんも、bちゃんも診断されたわけではない。私が「勝手に」障害と思って関わればいいのか関わってもいいのか、悩みながら保育をしている。

* B幼稚園の先生より

自閉症と診断された子どもの保護者が非常に熱心でいろいろな講演会に参加して勉強され

ている。「何かに集中している時は無理にやめさせないで欲しい」「予定が変わるときは前もって知らせて欲しい」など幼稚園にも要望され、望まれることは試してみるが、それが本当に子どもにとってよいことなのか悩んでいる。ある日幼稚園の帰りにお友達の家遊びに行き、それをきっかけに「毎日行きたい」と言うようになった。説明で納得して気持ちを切り替えさせたいという保護者の希望に沿って、その子に分かってもらえるようにと、絵カードも使ったりしてみたが、結局は「遊べないよ」とあきらめさせただけのことになった。本当は子どもの気持ちに沿って対処したくても、保護者の思いを優先しその子の思いをかなえてあげられなかったことがとても辛かった。園で私たちが見るその子の様子と、保護者、さらに小児科など専門家のその子に対する理解には隔たりがあると感じている。どのようにしていけばいいのか悩んでいる。

* C幼稚園の先生より

保育をする上で、子どもたちが毎日安心して楽しく過ごせるために常に一人一人の子どもの気持ちに寄り添いたいと思っている。cちゃんは自閉症と診断されている。自閉症の研究や講演会などで教えてもらったことの一つに、視覚からの情報が子どもにとって意味が大きいということがある。それで食品が調理により形を変えることで食べられなくなると聞いた。cちゃんもそのようなことがあるようで、園の給食では切られている人参や切り身の魚が食べられないのだが、家庭では切らずに姿のまま茹でてある人参や尾頭付きの魚の焼き物が食べられるという。cちゃんが大好きな四角形に切ったら、あるいは横一列に並べてあると食べるのかといろいろ試したりもするのだが、幼稚園での生活では限られた時間という制約があり「食べないと終わらないよ」とことばで縛り付けてしまうことが多々ある。こういうやり方で大切なことを逃してしまっているのではないかと悩みは尽きない。

* D幼稚園の先生より

小児科から自閉症の診断をもらっている4歳児のdちゃんは4歳児クラスに進級したときは、お部屋で活動することがほとんどなく、玄関や広い遊戯室の隅っこやトイレに行って隠れると云う状態が続いた。好きなポケモンのキャラクターのシールをイスに貼ったり、ポケモンのゲームを取り入れることで参加するクラスの活動も徐々に増えてきた。保護者との話し合いで、小児科では目でわかるようにスケジュールをカードにして子どもに見せており、その方法を取り入れて家庭でもカードを作って次の行動を知らせていて、子どももその方法に慣れてきているということだったので、園でも取り入れることにした。園での一日の流れを一つずつ細かく分け、シールを貼る、自由遊び、お片づけ、イスに座る、トイレに行く、などの一つひとつの行動が絵で描いてあるカードをクラスの正面に貼り、カードの行動が終わるたびにカードをはずしていくことにした。このやり方に興味を示してくれ、クラス内にいる時間が増え、また、カードに他の子供も興味をもったので、カー

ドを中心として他の子ども達とのかかわりも増えて行動が落ち着いたように思えた。保護者もその報告をととても喜んでくれた。しかし、夏休みの研修で、カードを使用して行動を喚起するやり方は、子どもが自らのしたい行動を抑圧してしまう危険性があると言う話を聞き、カードを使用するやり方がdちゃんにとり良いことなのか？スケジュール通りに進めているだけで実際にはdちゃんは苦しい気持ちになっているのではないかと心配になってきた。悩んだ末、少しずつカードを減らす方法を取った。20枚近くあるカードのうち1枚をはずしても支障はない様子で、少しずつ時間をかけてカードをなくしていったところ、カードがなくてもクラス内で活動出来るようになった。カードを信じている保護者にどう伝えればいいのか悩んだが、「これから進級、進学した時にカードがなくても大丈夫なようにカードを少しずつ減らしました。園ではカードがなくても活動に参加できるようになりましたよ」と伝えた。自閉症の支援についてはいろいろな情報があり、どれがdちゃんのためにいいのかわからないまま、試行錯誤の毎日が続いている。

～～ ロビーにてコーヒータイム ～～

- ④東田陽博氏（脳細胞遺伝子学）による、自閉症の遺伝子学研究の最先端についての話。
- ⑤菊知充氏（医薬保健研究域）による、脳機能計測による自閉症早期発見についてのお話。
- ⑥大井佳子氏（金城大学教授）と新井田要氏（子どものこころの発達研究センター）による、幼児期のアトリスク児の気づきと支援についての対談。
- ⑦以上についてのコメント 田中辰実氏（石川県私立幼稚園協会理事長） 横井透氏（横井小児科医院院長） 越田理恵氏（金沢市子ども福祉課課長） 幼稚園保護者会会長 NPO 法人アスペの会会員 福島杏子氏（JST アソシエイトフェロウ）